

朝鮮戦争調査直前のジレット・ジグレル 『私は P.S.F. にいた』¹から読み解く

松田祐子

はじめに

国際民主女性連盟が派遣した朝鮮戦争調査団のフランス人団員ジレット・ジグレル、彼女は、調査報告書『私は弾劾する』²の作成に携わっているが、その他にも、雑誌にルポルタージュを書き³、さらにその体験をもとにした小説『江西の殺人』⁴を著わした。ジレット・ジグレルとはどのような人物だったのか？ また、彼女はなぜこの調査団に加わったのか？

『私は P.S.F. にいた』は、ジレット・ジグレルが自身のレジスタンス活動の体験をもとに執筆した小説であり、1950年5月に刊行されている。すなわち国際民主女性連盟が朝鮮戦争調査のために派遣団を送るちょうど一年前のことである。したがって、この本を省察することによって、朝鮮に行くことを決める直前のジレット・ジグレルの心境や彼女を取り巻く状況を読み取ることができるだろう。

第一章 ジレット・ジグレルとは？

1. ジレット・ジグレルのプロフィール

ジレット・ジグレルは、本シリーズ第7号⁵ですでに紹介したように、国立古文書学校を卒業したアーキビストであり、中世史を専門とする歴史家である。第二次世界大戦中はレジスタンス活動に参加し、バス＝ザルプ地方で『持つ (Tenir)』という地下新聞を発行した。また新聞や雑誌にコラムを投稿するジャーナリストとしても活躍した。彼女の人物像については、『私は P.S.F. にいた』に「まえがき」を寄せているピエール・アブラムが書いているように、失われた上流階級出身の、例えて言えばポール・ブルジェの小説にでてくるような、美しく気品ある女性であった。そしてこの女性はレジスタンス活動を経てアラゴンやエレンブルグの登場人物のような現代的な女性に変身する⁶。

¹ Gillette Ziegler, *J'étais au P.S.F.*, Les Éditeurs français réunis, 1950.

² *Nous accusons. Rapport de la Commission de la Fédération Démocratique Internationale des Femmes en Corée du 16 au 27 mai 1951.*

³ 例えば、Gillette Ziegler, «Premier témoin français en Corée, Gillette Ziegler en a rapporté ces images atroces», *Regards* n° 305, 22 juin 1951, pp.5-7.

⁴ Gillette Ziegler, *Meutre à Kang-sé*, Les Éditeurs français réunis, 1953.

⁵ アジア現代女性史研究会編『アジア現代女性史』第7号、2012年 pp.52-69。この論考で、ジレット・ジグレルがフランス空軍パイロットの伴侶であったと述べたが、この人物は同姓同名の別人であると判明したので、その点についてここで訂正しておきたい。

⁶ Pierre Abraham, «Présentation», Gillette Ziegler, *J'étais au P.S.F.*, Les Éditeurs français

生没年は、前の論稿執筆時には不明であったが、1904年1月29日ニースに生まれ、1981年で亡くなっている。結婚前の姓名はジレット＝ファニー＝マドレーヌ・ゴーチエ (Gillette Fanny Madeleine Gauthier) であり、国立古文書学校を卒業した年は1926年である⁷。加えて、彼女は多くの推理小説を執筆しており、著者名として、本名を含めて6つのペンネームを使用している。すなわち、本名のジレット・ジグレル (Gillette Zigler) と結婚前の姓ゴーチエのイニシャル G をミドルネームに加えたジレット・G・ジグレル、さらに、ジル・グレイ (Gilles Grey)、トニー・ギルデ (Tony Guildé)、エルトン・ジョン (Elton Jones)、パトリック・ルガン (Patrik Regan) という4つの男性名を用いている。彼女がこれらのペンネームをどのように使い分けていたのかは定かでないが、1941年から1960年代半ばに書かれた100冊近い推理小説のほとんどには、これらのペンネームが使われている。一方、1935年に学位論文『中世グラス市の歴史』を著わして以降、中断していた歴史研究書は、1963年から1979年にかけて共著も含めて9冊あり、これらは本名のジレット・ジグレル著で出版されている。

このように、彼女は大衆向けの軽い読み物である推理小説を次々と発表する一方で、本論考で紹介する『私は P.S.F. にいた』や朝鮮戦争を舞台にした『江西の殺人』のような時代の証言といえるシリアスな作品も残している。つまり、歴史研究書からドキュメンタリー、大衆小説、推理小説と幅広いジャンルの著作があり、さらに複数の新聞・雑誌にコラムを投稿していることを考慮すると、彼女は大変精力的な人であったと推察される。一方ペンネームを6つも使っているのは、本人を特定されたくない何等かの意図があったのだろうか？ もっとも戦時中の地下新聞では、複数の偽名で署名するのは一般的であったので⁸、その習慣をそのまま継続していたとも考えられる。作品の構成と文体に関しては、『推理小説事典』に、「複雑に構成された古典的な謎の物語であり、複雑な陰謀と最終目的に至る長い説明を好む」⁹と書かれている。また別の本の紹介文には「軽快で共感を呼ぶ文章に簡潔で夢中にさせる文体」¹⁰となっている。このような文体上の特徴は、推理小説だけでなく彼女の著作すべてに共有されているといえるだろう。

前述したように、ジレット・ジグレルは1941年から1960年代半ばにかけて推理小説を量産しているのだが、刊行年を詳細に見ると、1948年と1949年と1951年には一冊も出版しておらず、1950年の作品は『私は P.S.F. にいた』一冊だけである。つまり『私は P.S.F. にいた』は、彼女が推理小説の執筆を排して取り組んだ、渾身の一作だったのではないだろうか。ジレット・ジグレルにとって推理小説は、気晴らしやなぐさめであった。というのは、『私は P.S.F. にいた』のなかで、ジレット・ジグレルは「彼女 (エレーヌ・ヴェテルレ) はこの小さな仕事 (推理小説) のなかに力強い慰めを見出した」あるいは「エレーヌは自分が信用されていないことに抗議して、推理小説に没頭することにした。彼女は2週間ごとに、

réunis, 1950, pp.3-6.

⁷ <http://litteraturepopulaire.winnerbb.net/t1854-gillette-g-ziegler>

⁸ 例えば、ジレット・ジグレルと同じように作家で、アーキビスト、歴史家、ジャーナリストのエディ・トマ (Édith Tomas) 1909年1月23日生まれ、1970年12月7日没は、戦時中の地下新聞においてはジャン・ル・ギャン (Jean Le Guern) あるいはオークソワ (Auxois) というペンネームを使っている。

⁹ Claude Mesplède (dir.), *Dictionnaire des littératures policières*. vol.2, p.1066

¹⁰ <http://litteraturepopulaire.winnerbb.net/t1854-gillette-g-ziegler>

希望、恨み、脅しをごちゃまぜにした推理小説を論壇に発表した」と語っているからである¹¹。

晩年のジレット・ジグレルの著作は、フェミニストの著作といえるものである。歴史的事実をもとに、女性たちに正当な評価が与えられるべきであることを論理的に訴えている。1975年に共著で著した『女性と仕事—中世から現代』¹²は、中世における多くの働く女性をとりあげている。また1979年の『すばらしき女性たち』¹³は、中世から現代までの6人の女性—クリスティーン・ド・ピザン、エリザ・ルモニエ、ジョルジュ・サンド、マリー・キュリー、クララ・ツェトキン、ベティ・アルブレヒト—をとりあげているが、いずれも『第二の性』を二次的な場に位置づけている偏見と闘った女性である¹⁴。見開きページには「国際女性デー1979年3月8日」と題してリオン銀行パリ地区支店の社会活動委員会による「社会生活における男女の真の平等の獲得を希求する」というアピール文が掲載されている¹⁵。この本でジレット・ジグレルが紹介しているのは、中世末期の作家クリスティーン・ド・ピザンである。クリスティーン・ド・ピザンは、執筆によって生計を立てた世界で初めての女性といわれており、女性蔑視が強かった中世末期にあつて、世の中の偏見に対して論理的に反論し、男性の権威者たちに一矢報い、女性の地位向上のために貢献した人物である。

2. ジレット・ジグレルと小説の主人公エレヌ・ヴェテルレ

『私はP.S.F.にいた』の主人公エレヌ・ヴェテルレは、『江西の殺人』^{カンセ}においては、朝鮮戦争調査団の一員として朝鮮にわたったフランス人団員のひとりとして登場している。彼女は帰国した後、女性組織の集会で朝鮮におけるアメリカ人の残虐行為について熱狂的に演説をおこない、聴衆を引き込む闘争的活動家アジテーターとして描かれている¹⁶。『私はP.S.F.にいた』のエレヌ・ヴェテルレは、『江西の殺人』^{カンセ}のエレヌ・ヴェテルレとはキャラクターが少し違っていて、もっと複雑で内省的、どちらかといえば、『江西の殺人』^{カンセ}の主人公ロランスに似通っている。もちろん、一人の人間が同時にいくつもの面を持っているからかもしれないが、朝鮮戦争調査団に参加して朝鮮の悲惨な状況をみた後の登場人物が、激しい闘争家に変貌するのはありえることである。おそらく朝鮮戦争調査団に加わったジレット・ジグレル自身の変化をそのまま再現しているのだろう。

国際民主女性連盟による朝鮮戦争調査団の派遣とその報告書が世界中にばらまかれたという事件は、国際世論、とりわけ西側世界のこの団体に対するまなざしを大きく変えた。アメリカと国連軍の残虐性を暴くという目的の報告書に激怒したアメリカは、国際民主女性連盟をソ連の影響下にある団体として徹底的に排除しようとしたのである。冷戦構造において西側の世界に属するフランス政府が、当時パリにあった国際民主女性連盟の本部をベルリンに追い出すのは、1951年1月のことである。1945年に国際民主女性連盟がパリで創設された時、この団体は Kommunismus とは関係なく、世界中の反ファシストを連合させ、平和を希求

¹¹ Gillette Ziegler, *J'étais au P.S.F.*, pp.109, 133.

¹² E. Charles-Roux/ G.Ziegler/ M. Cerati/ J.Bruhat/ M.Guilbert/ C.Gilles, *Les Femmes et le travail du moyen-âge à nos jours*, Editions de la Courtille, 1975.

¹³ Gillette Ziegler/ Marie Cécati/ André Rossel/ Gilbert Badia/ Annie Fourcaut, *Femmes extraordinaires*, Editions de la Courtille, 1979, pp.7-33.

¹⁴ *Ibid.*, p.5.

¹⁵ *Ibid.*, p.1.

¹⁶ Gillette Ziegler, *Meurtre à Kang-sé*, pp.125-130.

し、女性と子供の権利を守るというものであったが、その後は社会主義ブロックのコントロール下に入って行く¹⁷。このように見ていくと、ジレット・ジグレルの変化は、彼女自身の内面というよりも、彼女をみるまわりのまなざしの変化によるものが大きかったといえるだろう。

いずれにせよ、この2つの小説の中のエレーヌ・ヴェテルレはかなりの部分において彼女自身を投影しているのは間違いないだろう。例えば『私は P.S.F. にいた』はニースとバス＝ザルプ地方を舞台にしたレジスタンスの活動を描いているが、それらは作者自身の軌跡と類似しており、彼女が P.S.F. に所属していたことや彼女が『プチ・ジュルナル』紙に寄稿していたこと¹⁸も小説に書かれていることと一致する。さらに主人公のエレーヌ・ヴァテルレが推理小説を書いていることも作者のジレット・ジグレルと同じである。

第二章 『私は P.S.F. にいた』の時代

1. P.S.F.とは何か。

小説の内容を紹介する前に、小説のタイトルになっている P.S.F.とは何かについて説明する必要があるだろう。P.S.F.とは1936年から1940年まで存在した保守右翼の政党、フランス社会党 (Parti social français) の略称である。1936年7月に退役軍人団体の「火の十字団」が、人民戦線政府によって極右とみなされて解散させられた後、名前を変えて合法政党として創設されたのが P.S.F. である。総裁はフランソワ・ド・ラロック、フランス最初の右翼の大衆政党として1934年から1940年にかけて大きく発展し、最盛期には党員数が300万人とも言われた。また1937年には大衆紙『ル・プチ・ジュルナル』が P.S.F. の機関紙となる。1940年ヴィシー政府のフランス国は、「自由、平等、友愛」という共和国の標語に代えて「労働、家族、祖国」を掲げるが、そのスローガンは P.S.F. の使っていたものをそのまま借用している。

この党勢拡大の要因の一つに女性の役割の重視があった。「火の十字団」は当初から女性参政権付与を唱えていて、軍功勲章受章者の女性だけでなく団員の妻たちにも集会への参加を奨励した。1934年2月に婦人部が創設され、1年後にその数は525に達している。女性たちは組織の中心的な活動、すなわち社会事業、慈善バザー、ヴァカンスコロニー、食糧配給事業において、また宣伝活動において大きな役割を果たした。

長い間、「火の十字団」や P.S.F. は極右勢力であり、その指導者ラロックはヒトラーやムッソリーニに匹敵するフランスファシズムのシンボルである、という集合的記憶が定着していた。「火の十字団」という名称や、髑髏マーク、軍隊式行動様式がこのイメージの一因であるが、何とんでも1932年以降の「火の十字団」の勢力拡大に対して共産党が作りだした「ラロック＝ファシズム」というイメージが大きい。例えば、フランス共産党が1936年の

¹⁷ Celia Donert (Traduit de l'anglais par Michel Christian, «Femmes, communisme et internationalisme-La Fédération démocratique internationale des femmes en Europe centrale(1945-1979)», *Vingtième Siècle, Revue d'histoire*, 2015/2 n° 126, p.121.

¹⁸ Gillette Ziegler, 'Ecole et la Patrie' *Petit journal*, 14 Feb. 1939. (Samuel Kaiman, *The Extreme Right in Interwar France : The Faixceau and the Croix de Feu*, Ashgate Publishing, 2008 に上記のジグレルの書いた『プチ・ジュルナル』の記事の引用がある。)

選挙キャンペーンのために注文して制作したジャン・ルノワール監督の映画『人生はわれらのもの』のなかには、ヒトラーとムッソリーニにならんでラロック中佐と「火の十字団」の行進シーンが描かれ、ナチスとファシスト党と「火の十字団」のシンボルを並べた映像が使われた。しかしながら現在では、「火の十字団」はナショナリストで反議会主義的、そしてポピュリストではあったが、ファシストではなく、右派の大衆政党であり、極右政党ではないというのが公の見解である。ラロックは、ヴィシー政府に親和的ではあったが、ペタンによるフランスの休戦受諾に際しては、ドゴールに先駆けて抵抗をよびかけており、一貫して対独抵抗姿勢を取り続けている。ラロックは1943年ゲシュタポにより逮捕された。1944年5月に解放されたが、フランス国内では「危険人物」の容疑がかけられ、ひどく衰弱していたのにもかかわらず2年もの間収監されたあげく、1946年4月に亡くなっている。

では、ジレット・ジグレルが『私は P.S.F. にいた』を執筆した1950年代のフランス人は、この団体をどのように認識していたのだろうか？ 解放直後のフランスはレジスタンス活動家が権力の座にあり、ドゴール派とともに最大の犠牲を払ったことを正統性の根拠とするフランス共産党の勢力も強かった。そのため政体そのものがラロックに敵対的であり、一般的には対独協力者で悪者のイメージが浸透していた。しかしその一方で、学界レベルでは、「火の十字団」は退役軍人のボーイスカウトのような組織であり、思想は穏健で、アクション・フランセーズのような過激性はなく、1936年以降はむしろ中道志向をつよめて幅広い反人民戦線派の支持者を集めた、という見解が定着していた¹⁹。

2. フランス共産党について

共産党のほうは、1939年8月23日の独ソ不可侵条約を支持したために威信をなくし、1939年9月26日に解散に追い込まれた。1940年5月には、モスクワに滞在していたフランス共産党書記長モーリス・トレーズはドイツと戦わないように呼びかけている。また40年夏ごろでもまだ、共産党はコミンテルン（第三インターナショナル）の指令に従って、反ナチよりも、平和の要求やドゴール派への非難、フランス国内ファシズムとフランス国内の戦争挑発者の攻撃に重点を置いていた。このように閉塞状態にあったフランス共産党は、1941年6月の独ソ戦開始によって再び活動を開始する。ドイツとソ連の「同盟関係」が崩壊したので、フランス共産党も30年代の反ファシズム路線をふたたび取るようになったのである²⁰。

共産党の地下組織の特徴は、摘発や逃亡の被害を最小限に抑えるための細胞組織である。下部には「三人組」と呼ばれる3名からなるグループがあり、このグループの責任者のみが他の2人の同志を知っている。またこの責任者のみが上級の機関と連絡を保つ。ついで3グループからなる細胞が作られ、1ないし数地区、または1経営にいくつかの細胞を指導する支部が置かれる。その上に、1ないし数県の支部を統括する地方支部が置かれた。細胞と支部と地方支部はそれぞれ指導3人組（政治担当、組織と情宣担当、大衆活動担当）によって指導された。どんな場合にも政治担当者だけがそれぞれの上級機関と連絡をとり、それぞれの下級機関との接触は、組織担当者によって保たれた。このようなネットワークの構築に重

¹⁹ P.S.F.については、https://fr.wikipedia.org/wiki/Parti_social_fran%C3%A7ais と、剣持久木『記憶の中のファシズム―「火の十字団」とフランス現代史』講談社、2008年を参照した。

²⁰ 渡辺和行『ナチ占領下のフランス―沈黙・抵抗・協力』講談社メチエ、1994年、pp.183-191.

要な役割を果たしたのは、鉄道員や女性の連絡員である²¹。こうした非合法活動に適した組織によって、フランス共産党は勢力を拡大したのである。

フランス国内でのレジスタンスは、ロンドンのフランス委員会とは別個に生まれ、共産党がその基本的な母体となった。共産党は、国民的抑圧に抵抗し、国内全土にわたって行動した²²。戦後、共産党はレジスタンスで最も多くの犠牲者をだした抵抗する党、「銃殺された7万人の党」として復活する。1970年代まで続く栄光の「レジスタンス神話」のはじまりである。

3. ジレット・ジーグレルの立場

P.S.F.と共産党のこのような状況下、ジレット・ジーグレルが微妙な立ち位置にいたことは理解できる。彼女は P.S.F.の事務局にいたのだから、またアカデミックな世界に属する人でもあるから、この党の本当の姿をよく知っていただろう。しかしその一方で、国際民主女性連盟の朝鮮戦争調査団に加わったという事実は、たとえ彼女が共産党員でなかったとしても、共産党の影響の強い組織に属しており、そのシンパであったことは間違いないだろう²³。戦後、彼女の記事を掲載している雑誌『ヨーロッパ』²⁴は、共産党の路線にしたがって反ファシスト闘争を行っていた。また『私は P.S.F.にいた』にまえがきを書いているピエール・アブラムは1974年までこの雑誌の主筆であった。『私は P.S.F.にいた』と『江西の殺人』は「レ・エディトゥール・フランセ・レウニ」から出版されているが、この出版社は、フランス解放後の1949年に共産党の影響下にあるレジスタンスの中で生まれた3つの出版社が合併してできたものであり、その創設者で代表者はルイ・アラゴンであった。したがってジレット・ジーグレルは P.S.F.に対立するフランス共産党の意向に反対することはできなかっただろう。

この小説の内容は、レジスタンスの出来事であるのかかわらず、P.S.F.についての本のようなタイトルがついている。主人公エレヌ・ヴェテルレは P.S.F.から離れたとはいえ、P.S.F.をそれほど否定しているわけではない。また、エレヌの兄夫婦は P.S.F.に所属したままレジスタンス活動をしている。つまりこの小説はジレット・ジーグレルの複雑な立場を反映しているといえるだろう。

4. 女性たちのレジスタンス活動

戦後、レジスタンス活動家たちはもてはやされ、榮譽を得た。しかしながら、女性のレジスタンス活動家は、少数の有名な人—ダニエル・カサノヴァ(Danielle Casanova)、ベルティ・アルブレヒト(Berty Albrecht)、ルシー・オーブラック(Lucie Aubrac)など—を除いて、表舞台に出ることはほとんどない。占領への抵抗は日常的な小さな事柄から始まる。たとえばロ

²¹ ヴィクトル・ジョアネス「対独協力とレジスタンスの起源」、J.エレンスタイン他(杉江栄一/安藤隆之訳)『フランス現代史』上、青木書店、1974年、p.168。/渡辺和行、前掲書、p.188。

²² ヴィクトル・ジョアネス、前掲論文、p.168。

²³ 『江西の殺人』のなかで、エレヌ・ヴェテルレが「私は共産党に登録していません。しかし、それを知り、高く評価するようになってから12年になります」という文がある。(Gilette Ziegler, *Meurtre à Kang-sé*, Les Editeurs Français Réunis, 1953, p.134.)

²⁴ *Europe* は1923年にロマン・ロランの後援により創刊されたフランス文学雑誌である。
[http://P.S.F.r.wikipedia.org/wiki/Europe_\(revue\)](http://P.S.F.r.wikipedia.org/wiki/Europe_(revue))

ンドンのラジオを聞く、ユダヤ人団体への支持を個人的に表明する、ユダヤ人の子供を匿う、ゲシュタポの圧力に対して聞こえないふりをするなどである。占領下の状況に従うことを拒否することから、近隣の相互扶助のネットワークが作り上げられていき「連帯レジスタンス」が生まれた。主婦たちは物資の欠乏を訴え、行列やデモで占領への反対を表明した。地下新聞が、これらのネットワークを通して民衆の女性たちに配布された。この「連帯レジスタンス」は коммуニストの女性たちの指導によって民衆委員会をつくり、「対独強制労働」に反対し、捕虜の帰還を要求した。1944年11月に創設される「フランス女性同盟」(UFF)はこれらのグループが集まってできたものである。

女性のレジスタンスでの役割は、主として連絡要員、タイピスト、看護師であったが、彼女たちはまた、脱走者、怪我人、対独協力拒否者、逃亡者、パラシュート降下のイギリス人を匿い、食べ物を与え、宿を提供し、苦痛を和らげるなどの活動を行った。これらはレジスタンスの主要部分である下部構造を形成しており、リスクも伴っていた。しかし記録に残されることはなかった²⁵。

「フランス女性同盟」はレジスタンスの女性組織のうち、戦後も活動を継続する唯一の団体である。「フランス女性同盟」の代表は科学者のユージェニー・コトンであった。しかし名誉職的なものであり、実質的な意思決定をしていたのは共産党書記長モーリス・トレーズの伴侶であるジャネット・ヴェルメールシ、 коммуニストのローラン・カサノヴァの妻であるクロディーヌ・ショマであり、彼女たちが事務局を動かしていた。「フランス女性同盟」が多様な女性たちの活動を奨励することを目指しながら、その活動の幅がせばめられているのはこの共産党とのつながりの強さからきている。

「フランス女性同盟」の第一回会議が1945年6月に開催された5か月後の11月に、ジレット・ギーグレルたちを朝鮮に派遣する国際女性組織「国際民主女性連盟」がパリで創設された。「国際民主女性連盟」は、代表が「フランス女性同盟」と同じユージェニー・コトンであるだけでなく、「フランス女性同盟」のメンバーは「国際民主女性連盟」においても重要な役割を果たすことになる。

第三章 『私はP.S.F.にいた』

あらすじ

この小説は1939年9月の開戦から1944年8月のパリ解放までの5年間のパリ、ニース、そしてバス＝ザルブ地方が舞台になっている。主人公エレヌ・ヴェテルレをとりまく人々は様々な階層に属しており、出身地域、考えやイデオロギー、年齢なども多様である。すなわち、大ブルジョワやプチブルジョワもいれば、知識人、農民、労働者もいる。ヴェテルレ家の人たちはニースの出身だが、エレヌの夫のジルはアルザス出身者である。またナチに反対してドイツからのがれてきたドイツ人、迫害から逃げてきたユダヤ人も登場する。極右の人物も共和主義者も対独協力者もいれば коммуニストもいる。

さらにいえば、彼ら一人一人を何らかの決まったカテゴリーに分類することもまた困難で

²⁵ Yannik RIPA, *Les femmes, actrices de l'Histoire France, 1798-1945*, Sedes, 1999, pp.129-130

ある。というのは、戦時中の5年間という社会全体が大きく変化する時代を描いているので、登場人物を取り巻く環境が大きく変化し、それに伴って人々の内面も変化しているからである。そもそも、この作品のテーマは主人公エレヌ・ヴェテルレの変化である。

第一部

1939年12月28日のP.S.F.の集会。エレヌ・ヴェテルレと友人のジャン・リテールはこの党に違和感を抱き始めていた。リテールは1914年の戦争で重傷を負ったアルザス人で、7年前から彼にとってP.S.F.が家族、仕事、自分の全てになっていた。エレヌ・ヴェテルレがP.S.F.に入党したのは、1934年2月6日のパリのデモの時に、「火の十字団」に続いて歩き、「祖国のために闘う」という衝動につき動かされたためである。共産党と火の十字団、エレヌはどちらに入るか躊躇したが、「火の十字団はパトリオットだった」ので、そちらに登録した。彼女はラロックの誠実で善良そうな様子に感動して、夢中になった。だんだんと活動にのめり込んでいき、週に2、3回はP.S.F.の事務所夕食をとり、朝の4時に起きて新聞を売り、貧しい仲間のための古着や毛布、お金、食糧など、すべてを提供した。単なる党員から、地区代表、支部代表、県代表になり1937年には事務局に入り、大衆スポークスマンに任命された。エレヌの夫でアルザス出身のジルもラロックにひかれた。火の十字団の団員の3分の1がアルザス出身者だった。彼らは50年間祖国を奪われていたので²⁶、共和主義の理想、秩序だった理想が気に入ったからである。1939年末、P.S.F.の党員は200万人を超えていた。

9月に開戦が告げられたが、奇妙な戦争と呼ばれる戦闘のない状態が続いていた。夫のジルは3か月以上動員を待った末に、前線に出発した。

エレヌは19歳でパリに来てジルと結婚、ジルベールが生まれた。貧しいが幸福な生活を送っていた。戦争開始によって愛する人との生活が破壊され、ドイツに対する動物的な憎しみに襲われた。しかし、このときはまだ「暗黙の休戦」が続くことを望んでいた。エレヌが週3回過ごしていたフェミニストの新聞社がパリから移動したが、彼女は通信添削の仕事をしながらパリに残った。

医者で коммуニストのダニエル・イルシュとの出会いがあり、エレヌは祖国の意味を考えさせられる。昔、文献学研究所でジルと知り合いだったドイツ人エルンスト・ヴァハテルと6年ぶりに出会う。彼はナチの運動に参加していたが、恩師のユダヤ人を匿ったために5か月間強制収容所に入れられた後、脱走してフランスの収容所から外人部隊に志願していた。

エレヌは母親のジュヴェ夫人がいるニースに出発した。ニースの家では、ジュヴェ夫人が昔からの縁で社交界のブルジョワたちを不承不承迎えていた。社交界の雑談、兵士の家庭のための編み物、映画や劇、新聞を読み、話題はコーヒーが不足するかどうかだった。この人たちは単純な愛国主義で日刊紙の言葉を信じ、「赤軍」の敗北とヒトラーの発作を面白がり、イタリアはもうすぐフランス側について戦うと確信していた。

エレヌはニースのP.S.F.を訪れた。女性たちは小包を作ることと慈善バザーに忙しかつた。ラロックの話聞きに行くがもう魅力を感じなかった。彼女は無力感にとらわれた。

²⁶ アルザスは、1870年の普仏戦争によりドイツに占領され、1919年、第一次世界大戦後の講和によりフランスが取り返した。第二次世界大戦では、1940年のフランス降伏に伴い再びドイツに占領されたが、戦後再びフランスに戻った。

大ブルジョワのアルナル家とは子供のころからの付き合いをやめることはできなかったが、政治の話は避けていた。エヴリーヌ・アルナルはエレヌの結婚相手であるアルザス人を同国人と理解していなかった。

ジルは4月の終わりに休暇でニースにやって来たが、ドイツの攻撃があった10日後に再び出発した。ベルギーへのドイツの襲撃、イタリアとの戦争の噂が伝わってきた。人々は車に荷物を積み込んでヴァル、ブルターニュ、中央山地、ピレネーに出発した。

第二部

エレヌ、ジュヴェ夫人、息子のジルベールは、ニースを離れてバス＝ザルプの家に避難する。同じように荷物を積んだ車がつづき、駅には大勢の避難民が列車を待っていた。その後はフランス全土でこの大行列がつづいた。

レ・リーヴには、農地と長方形の大きな建物、現在はジュヴェ夫人のものになっている祖父の家、エレヌのためにつくられた小さな山小屋があった。農婦と5人の子どもたちが彼女たちを迎えた。

ラジオが「パリが明け渡された」と告げていた。新聞には「兵士同士で、名誉の中で」フランスは敗北を認めたと書かれていた。ラジオがロンドンからの放送を捉えた。「イギリスは戦い続ける。そしてフランスも。私はこの忌まわしい行為を受け入れない・・・ペタン元帥は卑劣漢だ」とエレヌの兄ラウルの妻サビーヌが声を荒らげることなく言った。

開戦までドイツに対する憎しみを独占していた「国家主義者」たちは、ドイツによる占領の2か月で対独協力を転換した。卑屈なニュース、愛国者の逮捕、ユダヤ人への迫害、労働者階級への命令、そのたびに彼女がそれまで情熱をもって宣伝していた言葉が浮かんだ。「国民革命」、エレヌはそれが何か知りたかった。

1940年10月の半ばごろ、エレヌはニースに行く用事があり、列車のなかでヴァハテルに出会った。アルジェリア、モロッコに従軍し、休戦のあと除隊して木こりをしていた。10月の終わり、エレヌはP.S.F.に辞表を送った。

11月17日にジルが戻ってきた。戦闘で砲弾をうけ怪我をしていた。バイエルンの留置場にいられたが、脱走してスイス国境で捕まり、10日前にもう一度脱走、8日間で国境に着いたのだった。留置場での虐待のせいでほとんど認識できないほど変わってしまっていた。顔はこわばり、額はでこぼこ、灰色の顔色、髪は黒く灰色がまじっていた。左腕はからだのほうに折れ曲がり指は青白かった。留置場ではドイツ人が何かというと殴り、反抗した人は銃殺された。しかしひどい扱いをしていたドイツ軍の准尉は本当はいい男だった。「なぜ、この人たちを歩かせなくてはならないのか？ 殺したいのならすぐに殺した方がましだ・・・この人の腕はまともな人のところに連れて行っていただけに治っていただろうに」とジルを見て話していた。フランスにたどり着き、歓喜しているジルに役人は言った。「何故脱走した？ お前たちはあちらよりこちらのほうが良いと思ったのか？」

エレヌはパリに戻りたかったが、ジルは脱走者なので、自由地区²⁷にいなければならな

²⁷ 休戦協定によって、フランスは独伊の占領地区、ドイツの併合地区、ヴィシーを首都とする自由地区に三分割された。北フランスは、イギリス侵攻作戦との関連で立ち入り禁止区域となり、ベルギーのドイツ軍政司令部の管轄下に置かれた。南北の自由な往来は禁止された。アルザス地方は、ドイツに併合された。

かった。12月には推理小説を執筆し、家事とジルベールの勉強を見て、朝晩にニュースを聞いた。イギリス人たちがアフリカで優勢になり、ヴィシーのラジオ・フランセーズでは敗北という言葉がライト・モチーフになった。

憲兵からジルあてに通告があった。アルザスはもうフランスではないので、ジルはフランス人ではなくなった。憲兵の持つ書類を見ると「1937年1月9日、フランスに帰化が認められる。1940年11月10日、無効」とあり、「政治思想」という言葉に二重線が引かれていた。文書には鬮斧（ヴィシーの印）の印紙が貼られていた。

リテールはマルセイユでレジスタンスのグループをつくった。一つ一つの通りが5-6人からなる支部を持ち、マルセイユの文書館員であるラウルは、自分の支部で公務員たちにビラを配った、ラウルの妻のサビーヌが印刷機でビラを刷り、箱に入れに行った。

ラウルはエレヌがレジスタンスのグループに何か渡すときには仲介すると申し出た。グループのなかでは、一人一人はそのリーダーと直接の部下しか知らないという決まりだった。エレヌは信頼されていないと感じていらだつが、ラウルは「信頼の問題ではなく、組織と規律の問題です。私はあなたに私のリーダーからの手紙を持ってきた。それだけです。あなたはおそらく支部を作ります。自分のリーダーにメンバーの名前を口頭で伝える。私はその人たちを知る必要はない」と言った。

エレヌはビラをつくり、自分が地下組織に所属することを知ってから、絶望感を脱した。ジルは怪我のせいで戦うことができなかったが、この組織の歯車であると感じた。

サビーヌはマルセイユで P.S.F. の昔のメンバーたちにプロパガンダを語った。彼女は昔の社会活動の闘志たちすべてを、行列の中、出入り商人の家、映画館を訪問した。サボタージュをはじめている役員がいた。女性たちは共産主義者だった。

エレヌは自分を証明する地下新聞をにぎりしめて、リテールの仲間の一人、国家のために情熱的に献身する男に会いに行った。イルシュだった。

第三部

11月はじめ、連合軍がアルジェリアに上陸した。サビーヌは畏にかかったユダヤ人のために偽造身分証明書をつくった。完成するまでの間、そのユダヤ人たちをエレヌのとこに送ってきていた。その頃は、フランクフルトのドイツ系ユダヤ人の夫とカトリック教徒でアルザス人の妻がいた。彼らの息子の1人は戦場で死亡、もう1人はゲシュタポに処刑されていた。偽パスポートができて、彼らが脱出に成功する保証はなかった。

ヴェテルレ家の人たちは、定期的にビラを配布、証明書を偽造、迫害から逃れてきたユダヤ人や外国人、9月の虐殺と強制移送の後残された子供たちの世話をした。エレヌは「立ち上がれ(Debout)」という地下新聞を編集し、ジュヴェ夫人がニースでそれを配っていた。しかし、エレヌは自分たちのプロパガンダが役に立っていないと感じていた。彼女たちは、イルシュが指令を伝える上部組織について何も知らなかった。エレヌはほぼ毎月ニースに行くたびにイルシュに会った。彼は偽の身分証明書を持っていて完全にその人物になりきっていた。

1942年11月11日、ドイツ軍が自由ゾーンに侵入した。マセナ広場でデモがあり、エレヌは歓喜で高ぶり、力いっぱい歌いながら歩いた。イルシュが後ろにいるのがわかった。もみあいが起こり、若者を助けようとした老官吏ドブレイさんが警官に殴られ頭蓋骨を骨折

して亡くなった。国からの年金を拒否していたドブレイさんの家には何も残っていなかった。

エレヌは命令によってアントルカステルのレジスタンスについて報告をしなければならなかった。レ・リーヴの人たちは皆イギリスのラジオを聞き、連合国のアフリカ上陸のニュースに希望を抱いていた。しかし、自分を犠牲にして黙っていることのできる人を見分けるのは難しかった。エレヌが一体感を感じたのは、農民と職人、「左翼の人たち」だった。しかし誰からも地下活動を推測することはできなかった。

ニースに行く列車の中で、ブルジョワ女性の話を嫌悪するそぶりをみせた農民に声をかけた。ルイ・マルタンは農業企業の運転手だった。暴動のあと収監され、3か月前に逃亡した。生まれながらの共産主義者だった。

エレヌは、タイプライターを受け取り、新聞を増刷し、ビラを編集して配った。ジルは闘争的でない「ゴリスト」としてとおっていた。マルタンは毎月15日の夜にウバックの丘の上の廃屋に新聞とビラをおいた。ジルは2か月ごとにニースに来て、野菜や牛乳の木箱の間にそれをいれて運んだ。何回か指令をもちかえり、エレヌが月末にリーダーに会った。リーダーはイルシュから理容師に代わった。ニースではレジスタンス組織が強化された。突然占領がはじまった。「勝利者たち」の礼儀正しい態度は豹変し、乱入、財産の収用、人質、公共の建物の占有を主張した。

ジルは命令を受けて、はじめて非合法活動の任務を遂行する。ドイツ軍将校に変装して、イタリア軍の収容所に収監されている2人のフランス人捕虜の救出に成功した。ジルはドイツ軍の軍服を着ると、奇妙な感覚を覚えた。フランス当局にとって彼はドイツ人なのだから、自分の国の制服を着ている。そしてドイツ人をだますために、自分の言語、自分の人種を用いる。いや、もっと複雑な感覚だった。ドイツとイタリアの警察は、この脱走の容疑者の家を検索したが、何もみつからず、ほとんど騒ぎにならなかった。

1943年3月27日、アントルカステルの市役所は、対独協力強制労働の人員を新たに募集するために、この地域の全ての外国人に出頭を促した。ジルはこの招集に従ったが戻された。アーネスト・ヴァハテルが突然訪ねてきて、自分が追われていることを告げた。エレヌは畏かもしれないと感じたが、不安でやつれ、悲しそうな彼の様子を見て部屋に招き入れた。ヴァハテルも選別委員会に出頭して帰されていた。彼はスパイとみられていた。

エレヌはニースからパリに行く列車の途中でリテールから物を受け取る命令をうけた。駅で書類を自分のカバンに入れ替え、プラットフォームにおりた。銃弾の音がして男が倒れた。対独義勇軍兵士のスパイの男が消された。パリの家は3年前のままだった。イルシュがカバンをとりやってきた。エレヌは彼が来ることを知らされていなかったと非難するが、彼自身それを知らされていなかった。

エレヌがパリから戻ると、アントルカステルの村は対独協力拒否者と戦うためにやってきたイタリア人に占領されていた。彼らはオートバイで走り回り、女を囲み、農民を監獄にひっぱり、食糧や宝石を盗んだ。占領軍の司令官ロヴェト隊長が暗殺された。ところが誰もそれを気にならなかった。1週間後イタリア人たちはアントルカステルを去った。一方、ヴァハテルはイルシュとリテールのグループで重要な任務に加わっていた。

1943年7月11日、連合軍がシチリアに上陸した。25日ムッソリーニが失脚、ファシズムが崩壊した。8月5日には赤軍によるオリエントの回復があった。

8月18日、見知らぬ人からサビーヌの手紙を渡された。符号で書かれていた「7月19日、

ナンバー2, 3, 7 (イルシュ、リテール、ヴァハテル) が印刷屋でゲシュタポにより逮捕された。裏切ったのは昔の仲間のラファイユだ」。新聞に「フランス国籍保持者、ジャン・リテールとフランソワ・ジルバルは 7 月 29 日、ドイツ軍人裁判所によって死刑判決を下された。・・・刑は、8 月 16 日銃殺によって執行された」と書いてあるのが目に入った。

イルシュのグループが捕まった一斉検挙以降、エレヌとジルはマルセイユとニースのレジスタンスとのあらゆる接触を失った。アントルカステルにはいくつかのグループが組織されていたが、ジルは「外国人」という特質によって不信を持たれていた。ジルはマルタンにだけ意中をうちあけることができた。

1943 年末から 1944 年はじめ、ドイツの崩壊が感じられた。ドイツの憲兵隊が訪問して来た。エレヌは、ジルが彼らに出会わないように手配し、ジルはニースに旅行中で留守だが帰ってきたら挨拶に行くこと約束して、その場をやり過ごした。あなた方はヴァハテルの知り合いか、と彼らは尋ねた。彼はドイツ国家に反対して働く危険なテロリストになっていた。

ルイ・マルタンがジルに提案した「もし本当にマキに入りたいなら、連れて行くことができる。しかし彼らは村のレジスタンスグループからよく思われていない。・・・あなたにショックを与えるかもしれない。彼らは共産主義者だ」。マルタンはキャプテンのアルノーをジルに紹介した。ジルは地下活動家になった。

エレヌは、ドイツの憲兵隊にジルが出頭しない言い訳の手紙を書き、ジルは仲間のこと、命のこと、もっと早く戦わなかったことへの後悔を書いてきた。エレヌは共産主義という言葉にもうたじろがなかった。「今、ジルは共産主義者です」と彼女は誇りと驚きを持って言う。

アルノーがジルの信任を示す紙片を持ってエレヌのところに来てきた。エレヌはあらゆる手段でエヴリーヌの兄で対独協力者のアンドレ・サッシを車に乗せるという命令を受けた。親独義勇軍の制服を身に着けたアンドレは、汽車でニースに行く予定だった。エレヌは自分と一緒に車で行くようにさそった。途中にアルノーとその仲間がいて、機関銃で脅してアンドレを降ろした。彼は電柱におしつけられ、仲間の復讐の的として処刑された。1944 年 3 月、バス＝ザルプのマキの活動家たちは敵を攻撃し、体系的に破壊し、裏切り者の処刑を続けた。

5 月 22 日、ジルに再び招集が届いた。26 日に出頭せよということだった。エレヌは、ジルが動けないという医者証明を持っていけば、出頭しない理由の説明になると考えた。医者に行く途中でアメリカ軍の爆撃に遭遇した。翌日のニュースでは死者は 400 人を超えていた。エレヌは、はじめて戦場の物理的な怖さに直面した。けが人や死体を集めるのを手伝っているうちに、突然、ある考えが浮かんだ。ジルはこの爆撃にあって死んだと主張すればいい。絶望から一つの希望が起こった。彼女はこのエゴイズムが恥ずかしかったが、頭の中では書く手紙の内容を反芻していた。

2 日後、エレヌはレ・リーヴに戻った。アルノーのチームがドイツのトラックを襲撃する手はずを調べていた。ジルもそれに加わり、エヴァルド・クラフトがトラックの前をオートバイで走りハンカチで合図するのを待っていた。クラフトはナチに反対したため収監され共産主義者になったドイツ人である。ところが合図を待たずに機関銃の連射がはじまった。アルノーのチームとは別の義勇隊が襲撃したのだった。先頭を走っていたクラフトたちが倒れ、ドイツのトラックはトンネルの中に戻ってしまった。夜「エヴァルド・クラフトは、世

界の自由のために死んだ」とアノルーは追悼した。

最初のバイクが白いハンカチを振っていたことが怪しまれ、ドイツ当局は出会った人すべてに尋問した。ルイ・マルタンがクラフトから情報を得ていたことがばれた。

ドイツの兵隊たちがやってきて、マルタンはなぐり殺された。「私は死ぬ。ほかの若者たちが同じ人生を過ごすのを避けるために・・・突然誇りが彼に湧き上がった。・・・すべてのコミュニストは立派に死んでいった」。

同じころ、汽車が駅に入って来た。ラウルがエレーヌに頼まれた大量の薬を持って降り立った。疑わしいものは持っていなかったが異様な分量の薬があやしまれ、尋問のためにホテル・ルーヴォワに連れて行かれた。次の日、嫌疑が晴れた。エレーヌのところで申し立てと突き合わせて、問題がなければ解放されることになった。エレーヌは取り乱した様子で、「ジルが！・・・ジルが！」と泣き叫びながら彼に近づいた。ラウルはぎょっとして彼らは何も知らないと言った。エレーヌは、「自分の夫のジルはニュースの爆撃で死んだ」と作り上げてきた嘘を言った。ボッシュ²⁸たちは帰った。

6月6日、連合軍がノルマンディーに上陸した。ミス（親独義勇軍）の隊長はいなくなった。副隊長はFTP（義勇遊撃隊）から死刑の判決を受けたが、「償いのために」マキに入らせてくれるように懇願した。数か月前までドイツが勝利すると確信していたブルジョワたち、金持ちたち、軍の兵士たちは突然解放の支持者になった。転向者たちは連合軍の勝利に拍手喝采した。

エヴリーヌ・アルナルとその夫に出会うと、2人はジルがマキにいることを素晴らしいと言った。彼らの娘たちはゴーストのピラを配っていた。

7月に、アントルカステルでは、ドイツ人たちとパルチザンとの戦闘が数日間続いた。マキの活動家たちは散り散りになった。7月末までジルは森の中で生活し、8月10日に武器のパラシュート投下をうけとり、再編成した。地中海からの上陸作戦のニュースが流れ、総動員令が布告された。ジルは再び志願兵に加わって出発した。

8月23日にパリ解放が告げられた。最初の感動の後、エレーヌは奇妙なけだるさにとらわれた。古い枠組みがひっくりかえされることなく、元どおりになるのを村の人たちは望んでいた。この戦争は他の戦争と同様に、戦闘員たちが戻り、不当な利得者が勝利し、後方の兵が榮譽をうけ「偉大」とよばれた戦争のように終わるのか？・・・いや、とエレーヌは考えた。何もかも同じではありえない。他の戦争では反抗者も地下潜行者もいなかった。彼らは敵と自らの政府を同じ憎しみで憎み、国境を越えて、おなじ闘争を推し進めるあらゆる人々を慈しむこと、ソビエト連邦を介してコミニズムを理解するようにはならなかった。「アクション・フランセーズとP.S.F.の友人たちの、新聞の大言壮語、4年前に私の人生の枠組みを形成していたすべてのものは今では恥ずべきことであるだけでなく、古臭くほとんど不可解に思える。・・・それでも私はこれらの人々を信じていた。・・・『プチ・ジュール』の目でコミニストを見、『グランゴワール²⁹』の目でソビエト連邦を見ていた。・・・ずっと昔から戦っていた人たちに加わるためには、いかなる道をたどるのか？・・・彼らは私をここから信じることになるだろうか？」

²⁸ Boche: ドイツ人への蔑称。

²⁹ Gringoire: 両大戦関係におけるフランス右翼の政治・文学雑誌。週刊。1924年創刊。1944年廃刊。

アメリカの軍服を着たエレンスト・ヴァハテルが現れた。これからアルノーのグループに加わると言う。彼はエレーヌに宛てたイルシュからの手紙を持っていた。

1943年8月13日の日付だった。イルシュは、エレーヌを愛していたと告白していた。彼は、自分が коммуニストになったのは、少年時代が貧しく不幸だったからではなく、幸福だったとしても、かわいがられていたとしても、自由を好み、不正を理解しただろうと言う。そして不正義な制度に対して、弱者の搾取に対して、金持ちに対して、「支配者」に対して立ち上がっているエレーヌはもうすでに коммуニストであり、彼女が始めたばかりの闘争を続け、自分を失わないために、いつもレジスタンスと呼ばれているもののことを思い出してほしいと訴えていた。

エレーヌはイルシュが死んだこと、そして彼を愛していたことを理解した。

おわり

第四章 考察、祖国の意味

以上のあらすじを見てわかるように、『私は P.S.F. にいた』には、第二次世界大戦の5年間という短い期間に、フランスの人々が体験したさまざまな出来事が描かれている。P.S.F. や共産党はどのような活動をしていたのか、どのような考えを持っていたのか、ブルジョワジーたちはどう過ごしたのか、社会の急激な変化に対応できたのかできなかったのか、レジスタンスの活動はどのように繰り広げられたのか、彼らはなぜどのようにしてレジスタンス活動に入り込んでいったのか、等々である。そしてその出来事のひとつひとつが複雑でシリアスで重いテーマを問いかけている。例えば、平凡でまじめな文書館員であり、政治を嫌っていたエレーヌの兄ラウルが、偶然駅に降り立ち、エレーヌのために持ってきたトランクいっぱいのお菓子のせいで、レジスタンスのマキによるトラック襲撃との関係を疑われ、一晩中考えをめぐらす場面がある。「この時代は коммуニズムに対する戦いだった。ボッシュたちは忘れられていた。ルイ・マルタンは確かに коммуニストだが、自分はレジスタンス活動家ではあるが коммуニストではない。それでもドイツ人たちは自分たち全員 коммуニストと呼ぶ。生涯マルキストと戦っていた自分が коммуニストというレッテルで死ぬのは滑稽だ。でももし明日銃殺されるなら、彼らを困らせるために『スターリン万歳！』と叫ぼう」などと考えている。つまりこの短い場面に彼自身のアイデンティティーと、彼に貼られるレッテルと、彼自身が演技しようとしている姿が絡み合っていてラウルという人物像を複雑にしているのである。

このようにこの小説のなかの一つ一つの事件、一人一人の登場人物の生き様をテーマとして考察するのはとても興味深い仕事である。しかし時間と紙幅の制約があるので、ここではエレーヌが何度も自問し、悩みつづける「祖国とは何か」というテーマに絞って考えてみたい。

30歳までのエレーヌにとって、祖国は無条件に素晴らしいものであった。あらゆる勇氣、あらゆる美德の化身であり、強者に対する弱者、圧政にたいする自由の保護者、改革、大義、自由をヨーロッパに知らしめ、決して絶望に身をゆだねたり、敗北に忍従することはない、これが祖国の姿であった³⁰。エレーヌは多かれ少なかれ、あらゆることをフランスに関連付

³⁰ Gillette Ziegler, *J'étais au P.S.F.*, Les Éditeurs français réunis, 1950, p.79.

けて決定していた。彼女が P.S.F.を選んだのは、それがフランスをもっとも高く位置づけていたからであった³¹。それゆえ、フランスが負けたと聞いたとき、エレヌは全てが終わったように感じ、絶望した。「もうどうなってもおなじことだ。もう幸福も休息もない。くたばったほうがましだ。終わりだ、終わり、もう死ぬ以外ない」³²。エレヌはこの時から祖国について考え始めるのである。

ところが、休戦後のフランスはエレヌの描いていたものとは違っていた。ペタンのフランスが作り上げた祖国は、奇妙なものだった。ペタンの演説では「敗北」という言葉が何度もくりかえされた。敗北を楽しむ狂信的な愛国者の奇妙な愛国的誇りであった³³。

エレヌは祖国や愛国という言葉がいままで考えてきたものとは違ってしまふことがあるのに気づき始める。「『愛国的』であるのがヒトラーの足元に転げまわることならば、私はもうそうではない。ラロックの言う名誉が敵の前で服従することならば、私はもうそれを望まない。モラーズの愛国主義がドイツに隷属するフランスを認めることならば、私は愛国主義をやめる」³⁴、このようにエレヌは敗北したフランスを否定する。

では、大ブルジョワのアルナル家の人たちにとっての祖国という言葉はどう理解されるだろうか？ 彼らにとって祖国とは彼らの財産、彼らの活動、彼らの所有物、そして彼らの愛すべき小さな習慣だった³⁵。つまり「ヤギがつながれた場所」、祖国とはそれでしかなかった³⁶。しかしながら、大ブルジョワのサークルの仲間であっても、極右でアクション・フランセーズのメンバーである老官吏ドブレイ大佐は、敗北のフランスを拒否している。彼はヴィシーの「フランス国」からの年金を受け取らない。彼はもうそれを祖国とは認めていない。一方、医者で коммуニストのダニエル・イルシュは、エレヌの考えている祖国の要素、すなわち「私の生まれた土地、私の子供時代、私の息子・・・守らねばならないもの」に、大ブルジョワたちはこっそり「私たちの活動、私の銀行、私の石油」を付け加えているのだから、それは「私の祖国ではないしあなたの祖国でもない」、と指摘する³⁷。イルシュは、祖国は選べないし、運命のきまぐれによって、殺人者、あるいは愚か者の国になってしまうかもしれない。だから祖国より先に正義とヒューマニティがあると言う。

アルザス人のジルにとっては、祖国は自分の意志とは関係なく知らない間に移動する。ジルはアルザスがドイツに占領されフランスでなくなってしまうために、外国人になることを知って大きなショックを受けるのだった³⁸。一方、ドイツ人でありながら、ユダヤ人の老教授を匿ったため収監され逃げ出して、反ナチの容疑で追われているエルンスト・ヴァハテルも、祖国を思う気持ちと祖国から拒否されることに苦しんでいる。「私は愛国者だ・・・私がヒトラーに奉仕するのを拒否したから祖国を裏切ったとみなしますか？」とエレヌに尋ねる。エレヌは、そのとき「私ももう祖国が何かわからない」と答えるのだっ

³¹ *Ibid.*, p.89.

³² *Ibid.*, p.76.

³³ *Ibid.*, p.110.

³⁴ *Ibid.*, p.83.

³⁵ *Ibid.*, p.116.

³⁶ *Ibid.*, p.56.

³⁷ *Ibid.*, pp.28,31

³⁸ *Ibid.*, p.113.

た³⁹。

ドイツが足を踏み入れた時、人々はみな自由という言葉と祖国という言葉の意味を再発見したのだった⁴⁰。

おわりに

もしエレヌ・ヴェテルレの心境がジレット・ジーグレルのそれと重なると仮定するならば、「フランスがすべて」、今はやりの言葉でいえば、「フランス・ファースト」だった彼女が、国際民主女性連盟という国際組織に関心を持ち、朝鮮戦争調査団のような活動に積極的に加わるようになったのは、レジスタンスの経験のなかで、ジルの立場のような人、エルンスト・ヴァハデルやエヴァルド・クラフトのようにヒトラーに反対するドイツ人の立場の人、キャプテン・アルノーのようなマキに参加する対独強制労働拒否者の人、等々の様々な人との交流を経て、祖国や愛国者の意味を深く考えるようになり、それが無条件に受け入れることのできるものではなく、またいつの間にか自分の認識していた「祖国」ではなくなってしまうこともあり得る、とわかったからではないだろうか。

そして最後に出てくるイルシュの手紙が、この小説の結論と見るならば、不正義に対して、弱者への搾取に対して、支配者に対して立ち上がること、つまりレジスタンスこそが、祖国に代わる大切なものであり、最も価値のあるものなのである。ジレット・ジーグレルにとって朝鮮戦争調査に加わることはレジスタンスの延長線上にあるもの、あるいはむしろレジスタンスそのものであった。

³⁹ *Ibid.*, p.165.

⁴⁰ *Ibid.*, p.203.